

人生の転機になるような出会いを



学長
すみだ くにしげ
角田 邦重

新入生の皆さん、入学おめでとう!!

もちろん皆さんは、それぞれの想いを胸に中央大学に入学されたことでしょう。いずれにせよ、人生の最も多感な時期を、中央大学で過ごすことになるのです。そして、学びと、友人を始めとする人との交流の両面にわたってさまざまな出会いがあり、成長の過程では悩みも挫折も経験することでしょう。深い悩みを経験した者がもつとも良く成長するものだと言うべきなのでしょうから。そう考えるだけに、私は、皆さんに、人生の転機になるような学生生活を

送ってもらいたいと思うのです。そんな想いで自分の学生時代を振り返ってみる気持ちになるのも、恐らく、私がそれなりに歳を重ねたせいかもしれません。

今は法律学（労働法）を専門にしていますが、九州で過ごした高校生のころはどちらかと言えば文学青年で、大学に行くなら文学部だと決めていたものです。しかし東京に出たという切実な思いは、事務所を手伝いながら大学に通う者を探していた郷土出身の弁護士と出会って実現することになり、中央大学の法学部が良いのではということになりました

た。今から考えると、文学青年から法律家志望への転身という人生最初の転機です。もつと直接的な転機は、漠然と卒業後の進路を考えるようになった大学二年生の秋に、司法試験の受験を目指す受験団体の一つに入会したことです。入会してまもなく、それまでの情性でサルトルの小説か哲学書を読んでいた私の肩を叩いて外に連れ出したのは、その年の司法試験に合格したばかりの先輩で、その日から、受験団体特有の手弁当による指導を受けるようになりました。朝九時には机の前に座り、原則として夜一〇時までは大学に残る、日曜日は答案を書き、終わったら仲間でもう一度点検し合うといった判で押したような受験生活でした。人生二度目の転機は、この出会いにあったと思っています。

与えられた環境の中で一瞬ごとに将来を選び取る行動の連続（「投企」と訳されています）なのだという位の意味だと思えます。何か行動を起こしたわけでもなく、判で押したように退屈きわまりないように見える毎日でしたが、精神的には緊張の連続で、それなりのドラマでもありました。今になって振り返ると、むしろ息をひそめるように一つのこと集中する時期をもったことが転機をつくり、また仲間がいてこそ出来たのだと思っています。

中央大学は全国から三万人の学生が集い、文・理にまたがる学部、大学院をもった総合大学として、学ぶ環境も、人との出会いも、十分に用意しています。人生の転機になるような出会いを経験してもらいたいです。皆さんの健闘を期待しています。

「波が運んできた。それが人生だ」とはフランスの実存哲学者サルトルの言葉ですが、人生は決められたルールの上を走って行くのではなく、

学ぶ喜びを



総長
よかま ひろし
外間 寛

新入生諸君、入学おめでとう。受験勉強から開放されて、晴れ晴れとした気持ちで入学の日を迎えたことでしょう。これから新しい大学生活が始まります。第一歩を踏み出す前に、自分は何のために大学にきたのか、ひとりで考えることから始めましょう。いまは人生の目的を定めるのが難しい時代です。でも、目的のないその日暮らしの生活では、人生は空しいでしょう。なにが希望をもって、その目標達成のために自らを規律し、努力を重ねる日々を送りたいのです。諸君のなかには、なんのためにと自問してみても、確かな答えを見出すことのできない人もいます。今はできなくても、やがてその答えが得られるように、自分でよく考えましょう。大学生活は、なによりも先ず考える生活です。

大学は、高校までの学校とは違います。大きな違いのひとつは、大学が多元的な社会であるということです。中央大学には六つの学部があつて、教師も学生も含めて、専攻を異にする沢山の人が一緒に学んでいます。学生には、一般の入学試験に合格して入学した者のほかに、スポーツ能力に優れているために入学を許可された者、帰国子女、あるいは外国からの留学生など、多様な経歴の人々がいます。また思想の面でも、自覚的に保守的な人、革新的あるいは急進的な人など、さまざまです。大学は、このように志も、経歴も、考え方も多様に異なる人々が、お互いの違いを尊重しながら、自由に交わり、自らの知見を拡げることのできる社会です。自分の狭い殻に閉じこもることなく、心を開いて多様な経験から

学ぶように努めたいものです。しかし、ただ気軽に他人と付き合えばよいというわけではありません。自分の志す学問を大切にしましょう。大学は、学問の府であることを忘れてはなりません。

中央大学は、どの学問の分野においても、日本の大学で期待し得る第一級の専門教育を提供することができます。各学部はそれぞれ実に魅力ある教授陣を整えています。しかし、教師が優れているというだけでは、よい大学教育が行われる保障にはなりません。教師と学生との間で絶え間なく真剣な対話を続けることによつてはじめて、大学教育はその実をあげることができます。もちろん学生は、はじめから教師と対等な議論ができるわけではありません。どの学問の分野にも、長い歴史と豊かな蓄積があり、そしてそれぞれに固有の約束事があります。まずは講義を聴き、教科書を読んで、謙虚に学ばなければなりません。でも講義で聴いたこと、教科書に書いてあることだけを勉強するのはなく、聞かなかったこと、書いてないことまでも自ら探求して、教師に食つて掛かるくらいの意気込みが必要です。学生に鋭い質問を浴びせられて、的確に答えることができず、困惑するこ

とがあつても、それは教師にとつてこの上もない喜びです。それによつて教師も深く学ぶことができます。教師はなんでも知っているわけではありません。分からないことに比べれば、分かっていることは米粒ひとつの大きさにもならないでしょう。そもそも完成し、完結した学問はひとつもありません。教師も学生も、互いに学びつつ真理を追い求める。それが大学です。

真理の追究というと、なにか現実離れがして、凡人には能わぬことと思ふかもしれません。そんなに難しく考えなくてもよいでしょう。専門の学問に真剣に取り組むということです。世間の利害関係にとらわれず、一歩退いて、それぞれの学問を通じてどこにでも通用する正しいこと、人間にとつて大切なことを求めるのです。その心がけがあれば、学ぶうちに、学ぶことの喜びを発見するでしょう。

中央大学は、120年の歴史と名譽ある伝統をもち、多くの面で国家・社会に大きな貢献を果たしてきました。新入生諸君は、中央大学の一員となつたことに誇りをもち、意義ある大学生活を送り、豊かな学力を身につけるように心掛けてほしいと思ふいます。

いま、社会が君たちの力を必要としています！



法学部長
かない たかし
金井 貴嗣

今、日本の社会は、大きな変革期にあります。戦後形成された政治・経済等、さまざまな制度が「制度疲労」を起こして、改革が求められています。制度を担うと同時に、制度の見直しに携わる人材の養成についても改革が進められています。昨年4月に開校された法科大学院も、その一つです。市民の目線にたつて法律実務に携わる検察官や弁護士、国際化や情報化が進展する中で、国際取引に係わる紛争に対処できる弁護士、研究開発・技術革新にも詳しい裁判官や弁護士が、必要とされています。公務員等、他の職業についても、事情は同じです。少子高齢化に伴って社会保障制度や高等教育制度の見直しが進められています。しかし、年金問題ひとつとっても、解決策が明確になっていません。企業も、国際化や技術革新の進展に対応できる「組織の再編成（リストラクチャ

リング）」を迫られています。国際社会に目を転じてみると、さまざまな変化が生じています。テロ・紛争の頻発、地球温暖化による異常気象、食糧危機、天災等々。日本の社会が、また国際社会がどのような仕組みになっていて、今、どのような方向に変わろうとしているか。君たちは、どのくらい、わかっていますか。

本を読み、人の意見を聞いて、自分の考えをまとめ、それをわかりやすく主張することができずか。外国語でコミュニケーションすることができずか。

おそらく、今、そのような知識や能力はないでしょう。なくてもいいのです。大切なことは、是非、大学で、そのような能力を身につけてほしいのです。

4年間は、「あっ！」という間に過ぎてしまいます。大学生活を有意義に過ごしたかどうか、その後の人生に大きく影響します。勉強することとは、社会を良くするためであると同時に、君たち自身のためです。

メダルの表と裏



経済学部長
こぐち よしあき
小口 好昭

皆さん、経済学部に入學おめでとう。ご父母の皆様にも、心からお祝い申し上げます。経済学部は、今年、学部創立100周年を迎えます。皆さんは、新世紀の経済学部の担い手です。

ところで、2004年のアテネ・オリンピック。この記念すべき大会で日本体操が28年ぶりに金メダルを獲得しました。日本選手は、メダルラッシュといわれるほど各種目で活躍しました。基礎をしっかりとたたき込まれていた成果だという、元オリンピック選手であったテレビ解説者の言葉が印象的でした。体操選手へのインタビューでは、6人が異口同音に、目標に向かって厳しい練習を積み重ねてきた結果で、練習通りやれば大丈夫との自信があったと述べました。放映されるのは光り輝くメダルの表側ですが、その裏側に

は毎日の地道な練習の積み重ねがあるのです。彼らの口から語られると、本当に心を打つ言葉です。

オリンピックが開催された8月の夏休みは、受験生にとっては、かつては天下分け目の関ヶ原などと言われる重要な時期でしたが、新入生諸君はどう過ごしていたでしょうか。

オリンピックは4年ごとの開催。アスリート達は次の4年目を目指して激しい練習に突入しました。君たちも、自分の将来を見据え、自分自身のメダルへの目標を立て、わが経済学部でしっかりと基礎固めをしてください。

とは言っても、堅苦しいだけの大学生活を勧めているわけではありません。全国各地から、あるいは海外から中央大学に集う学友達と、若者らしく生き生きと、そしてのびのびとキャンパスライフを楽しみ、自分の可能性をどんどん伸ばしていきましょう。

教養とビジネス・マインドと



商学部長

さかいしろうさぶろう
酒井正三郎

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これから始まる大学生生活にむけて、みなさんの胸は期待感と心地よい緊張感に包まれていることと思います。以下新入生のみなさんに、ここ数年来の商学部の教育課程の改善・工夫の取組について若干紹介し、お祝いの言葉に代えさせていただきます。

商学部は、昨二〇〇四年度、「実学理念に基づく高大接続教育の展開」というテーマで、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されました。全国の国公私立の大学より総計で五三四件の申請があり、そのなかから採択数五八件、採択率十・九%という狭き門でした。これは、商学部が選定に値する高度の、特色ある教育を実践している学部であると評価されたことを意味します。この取組みは、「深い教養と情報スキルを身につけ、国際的に活

躍できる人材の育成」という商学部の実学理念を前面に押し出しながら、「高大接続教育」「入学準備教育」「学部教育」の、高校から大学に至る教育課程の三つのステップを体系的に結びつけるプログラムとして実践されてきているものです。

このうち「学部教育」においては、導入教育や基礎教育をベースにして、専門教育および実務対応型教育を提供することを通じて、教養に裏付けられたビジネス・マインドの育成が目指されています。換言すればこれは、各自が自分の進路を客観的に把握し、それを実現していくために必要な知恵とスキルを獲得することを目標にした教育、ということです。大学の四年間は、人生のなかでかけがえのない、とても貴重な時間です。どのような選択をおこなうにせよ、一人ひとりがこの商学部において、悔いの残らない豊かな学生生活を送られるよう期待してやみません。

「事柄の本質を読み解く力」を



理工学部長

かざましげお
風間 重雄

この数年、教育界で話題になっている国際的な学習到達度調査が二つある。ひとつは、理科ならびに数学の知識量を問うTIMSSで1995年から行われており、日本はやや下降気味ながらもずっと相当上位に位置している。もうひとつは経済協力開発機構(OECD)が2000年から始めた略称PIISAで、知識量よりは、「問題解決能力」や「知識を活用する能力」を測ることを主眼としている。PIISAの対象は15歳の生徒であるが、日本の成績は世界的に見ると上位グループには位置するものの、あまりふるわない。この調査で一躍脚光を浴びたのはフィ

ランドである。読解力調査では平均得点で日本よりも50点近く上回って世界第一位であった。その後フィランドには教育視察団が訪れるようになつたが、彼の地の先生方は、「わたしたちは何も特別なことはない。普通に子供たちに好きなように勉強させているだけだ」と困惑気味に語ったという。しかし、フィランドは知る人ぞ知るIT大国である。

この春、受験勉強から解放されて大学生となった皆さんにとって、最も要求されていることは、「事柄の本質を読み解く力」の涵養である。最新のノウハウは必ずすたれ、知識も陳腐化する。いつまでも持ちこたえられるものは、「読み解く力」である。そのためには理工学部は恰好の場である。自然の不思議を肌身に感じ取り、人類の資産である科学を通して自然を読み解く。高度な技術の背後にある人類の知恵を読み解き、新たな知恵へとさらに発展させる。科学が新技術を生み、新技術が新たな科学の展開をうながす。そのようなダイナミックな知的興奮を味わえる仕合わせを日々噛みしめながら、充実した大学生活を送ってほしい。

豊かな明日への飛躍を



文学部長
まつお まさひと
松尾 正人

リスター（法廷弁護士）の資格を獲得しました。

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。大学での新たなスタートはいかがでしょうか。皆さんがこれから過される学生時代は、人生の最も可能性に富んだ、将来に向けた貴重な糧を得る期間です。

中央大学の前身の英吉利法律学校を創設した増島六一郎も、皆さんと同じ時代にその後の人生の原点がありました。彦根藩の下級武士に生れた増島は、東京での勉学を志して親友と二人で家を飛び出し、義兄に連れ戻されて失敗。二度目によつと藩の許可を得て上京しました。始めは漢学を学びましたが、明治維新の新しい時代、文明開化の東京で英学の重要さを知り、外国語学校に入学します。その後、東京大学に進んで、代言人（弁護士）が近代社会に重要な役割を果たすことを知りました。そして三菱の援助を得て英国に学び、最後はミドル・テンブルで最高のバ

その増島は帰国後、若き友人たちとともに英吉利法律学校を創設します。増島が東京での勉学を断念していたら、英国に留学してバリスターを志すことがなかったらどうでしょうか。明治18年創設の英吉利法律学校もその後の中央大学もなかったかもしれません。

大学時代は、過ぎてしまふと、あつという間だったように感じられます。いうまでもなく大学は幅広い教養を身につけるとともに、専門的知見を培うところです。実社会と異なつた場で、さまざまな知識を蓄え、自由に物事を考え、グローバルな視野に立つて模索することができまふ。可能性に富んだ、明日への飛躍につながる数年間です。

皆さんが学生時代を有意義に過ぎ、将来の飛躍につながる充実した期間となることを、心からお祈りしています。頑張つて下さい。

「学ぶ」とは何か？



総合政策学部長
おおはし まさかず
大橋 正和

英語では、高校までの教育を「エデュケーション」といい、大学以降の生涯教育を「ラーニング」と区別する。エデュケーションとラーニングの違いは何かという点と自律的に学習できるかどうかの違いである。高校までは、教科書がありそれに従つて勉強をし、ほとんどの問題に解答が存在する。

大学の教育がラーニングと呼ばれるのは、何を学ぶのか？、どの様に学ぶのかも含めて、学ぶ対象も、学ぶ方法も自律的に考えなくてはならないということである。カリキュラムという大まかな指針はあるにせよ、問題を発見しそれをどの様に解決したらよいか等、学習する方法を身につけるとともに、新たに知識・知見を創造する方法を学ぶことにある。

しかし、従来の学問には体系がある。たとえば、数学という学問の体系を考えてみればよくわかる。順番

に積み重ねをししないと理解できない。1度理解できなくなるとそれから先はついていけなくなり数学嫌いを作り上げることになる。英語や国語も同じようですが、この体系を無視することは難しいのである。この部分は、エデュケーションである。ラーニングで大事な点は、エデュケーションとして個々の体系を学ぶばかりでなく学問に関する考え方やものの見方といった個別の事実からその原因や考え方を追求し普遍化された共通の原理や理論を見つけ出すことである。

大学で学んだことの中で細かい事実は忘れてしまふことではあつてもこのような基本的考え方やラーニングの方法は忘れないものである。さらに大学で学ぶと言うことは、授業ばかりでなく課外活動や授業期間外にも学び（ラーニング）の姿勢を忘れないでほしい。どうか諸君の大学生生活がエデュケーションではなくラーニングであることを願つてやまない。